復古様式の造営過程における絵師の役割

寛政度内裏に関する研究 (1)

ROLE OF PAINTERS IN REBUILDING THE IMPERIAL PALACE
IN THE TRADITIONAL STYLE

Study of the imperial palace in the Kansei era (1)

岩間 香*, 中嶋節子**, 植松清志***, 谷 直樹****

Kaori IWAMA, Setsuko NAKAJIMA, Kiyoshi UEMATSU
and Naoki TANI

In the extant paintings of the Tosa School, now in possession of the Kyoto City University of Arts, there are materials which were concerned with the reconstruction of the Imperial Palace in the Kansei era. By comparing these materials with the Osashizu-goyo-ki, it is seen that Tosa Mitsusada contributed much to reconstruct the burnt Palace in the traditional style. He collected many copies of the interior and exterior views of ancient palaces, and redrew them as lucid pictures. He also collected materials which helped us comprehend details of the architectures of the traditional Imperial Palace.

Keywords: Imperial Palace, Dairi in the Kansei era, the traditional style, Funpon, Tosa school

御所、寛政度内裏、復古様式、粉本、土佐派

はじめに

江戸時代における内裏は、慶長度、寛永度、承応度、寛文度、延宝度、宝永度、寛政度、安政度と8回の造営が行われている。いずれも京都大工頭の中井家が配下の棟梁衆と大工組を動員して作事を担当している。このうち寛政度と安政度（現在の京都御所）の内裏は、平安時代の大内裏の再現を目指して造営された、いわゆる復古内裏である。

寛政度内裏は、天明8年（1788）正月30日に焼失した宝永度内裏の後に再建されたもので、朝廷側の強い希望で復古が企てられ、寛政2年（1790）11月に竣工した。復古の根拠とされたのは裏松固禪の著した『大内裏図考証』で、復古様式が実現したのは、紫宸殿、清涼殿、小御所、皇后御殿の飛香舎、紫宸殿前の回廊・門であった。

寛政度内裏については、建築史の分野で藤岡通夫、平井聖、谷直樹により大工頭中井家の指図が紹介され、藤岡、平井や島田武彦によって「造内裏御指図御用記」から工程の一部が明らかにされている。また内裏造営の基本資料となった『大内裏図考証』についての考察や、歴史学や美術史の立場からの論考もある¹⁾。

固禪の考証は多くの文献・絵画にもとづき、平安内裏を再現した画期的なものであったが、実際の造営においては多くの困難がとも

なった。文献・絵画に記録されるものは限られており、立面や細部には不明な所が少なくなかったからである。紫宸殿、清涼殿という巨大な建築を実現するには、さらに詳細な資料を要したのではないだろうか。「造内裏御指図御用記」によると、大工頭の中井、棟梁の岡嶋、修理職の木子そして絵師の土佐らが、建物に関して多くの提言を行い資料を作成している。しかし彼らが具体的にどのような資料を用い、それが建築の復元にどのように生かされたのかについては、これまで取り上げられたことはなかった。一方、土佐家に伝来した資料の中には、内裏関係の建築図が多数含まれているが、これらがどのような経緯で制作されたのか、明らかではなかった。

今回、「造内裏御指図御用記」と「土佐家内裏造営粉本」を対照したところ、図の制作時期や背景が特定でき、しかも朝廷側の公衆が検討の材料とした図が具体的に明らかになった。本稿では二つの資料から絵師が復古様式の実現に果たした役割を考察したい。

1. 造内裏資料とその概要

本論で用いる資料を明らかにしておく。

(1) 「造内裏御指図御用記」（宮内庁書陵部蔵）

「造内裏御指図御用記」（以下「御指図御用記」と記す）は、大判事・勢多章純による天明8年4月7日から寛政4年10月までの寛

* 摂南大学国際言語文化学部 助教授・芸術

** 大阪市立大学大学院生活科学研究科 講師・博士(工学)

*** 大阪人間科学大学人間科学部 助教授・博士(学術)

**** 大阪市立大学大学院生活科学研究科 教授・工博

Assoc. Prof., Faculty of International Languages and Cultures, Setsunan Univ., M. Arts

Lecturer, Graduate School of Human Life Science, Osaka City Univ., Dr. Eng.

Assoc. Prof., Faculty of Human Sciences, Osaka University of Human Science, Ph.D.

Prof., Graduate School of Human Life Science, Osaka City Univ., Dr. Eng.

表1 造営過程と絵師の動向

年号	一 般	絵 師	
天明8 1月	30内裏焼失		第一期
3月	22幕府、老中松平定信に修築を命ず（「徳川実紀」） 25造内裏御用懸・造内裏奉行任命、裏松固禪参内		
4月	復古様式が協議される（「裏松家譜」「輝良公記」）		
5月	9松平定信江戸を立つ 18-20宝永度と新規の坪数書出す 23松平定信上洛。24絵図を見る	19賢聖障子・通障子・竹臺・石灰壇座 壺・櫛形・日月花門扉の古図を持参 24蒔古図を提出	
6月	1坪数出来 1定信、財政難の為復古に反対 2坪数を粗絵図で検討	13土佐、昆明池障子寸法・仕様・金具等を粉本・古図で調べ報告 15清涼殿障子を絵巻から正面図に 26承明門図作成	
7月	9絵図料紙の準備 24宝永度の軒高棟高を調査	<6/24-7/24蒔古を描く>	
8月	関白、定信に再度復古を要請		
9月	11島津斉宣・細川治年に助役命ず		
10月	<6/4-22竹の記事多し> 26内裏上棟		
11月	<屋根の記事頻出>		
12月	5紫宸殿紙形建図出来 23諸建物の雛形を提出		第二期
寛政 元年 1月	7禁裏・仙洞等御用掛の名前 15諸紙形建図すべて出来		
2月	20清水谷家の土地引渡し	13-30障子縁・引手・唐戸・妻戸の釘隠・蝶番・御簾・房を絵巻で調査 27清涼殿棟間図を提出	
3月	13紫宸殿の屋根雛形出来 15諸門・回廊の寸尺を改める 22鴨居下の雛形出来 27御地築始め	12-16絵巻から竹台2種描く 18-23清涼殿・小御所・常御殿の障子の紺青引・群青引を決定 20常御所絵の間決まる	
4月	15屋根葺き方検討 24清涼殿南廊・屋根雛形出来 <21-5屋根記事頻出> 25清涼殿高さ治定 <床・天井の記事頻出> 27禁裏天井屋根裏の図を提出 <7-27葺記事頻出>	6仙洞・女院御所の絵師名を提出	
5月	1葺図・屋根裏雛形治定 8幕府普請方の紫宸殿木形出来 15清涼殿屋座角柱が丸柱に 28幕府紫宸殿寶子縁木形伺出	8紫宸殿・常御所・仙臺間の絵図提出 10参加絵師の由緒書持参 <10-20絵師の身元吟味> 15絵巻から帽額・御簾を写す	
6月	14常御所・仙臺間の絵図7枚出来 19御簾見本出来 24引手図等、幕府方に引渡し 29石灰壇の土見本出来	1石灰壇・塵壺図を提出 1絵師宿所差出すよう申渡し <度々猫障子下絵描改め>	
閏6月	13幕府普請方の清涼殿木形出来 29清涼殿木形小屋場へ		
7月	4内裏新始		
8月	13立柱		
10月	常御殿調度を検討 19棟包の獅子口の図決まる	土佐家、禁中御造営御用仰出 6絵師の請書61通持参 30御簾・房を図す	第三期
寛政2 1月	20清涼殿唐紙の本文決定	25昆明池障子・荒海障子決定	
2月	4屏風・簾・常御殿の框など決定	19鳥居上小障子、雲鶴図に決定	
3月	6年中行事障子の仕様決定 27清・紫向殿などの金物破風検討	3絵師73人の名前を提出 13常御殿障子絵決定	
4月		2荒海・鳥居障子の下絵提出 8昆明池障子古図拝見	
5月		仙洞御所・女院御所御用仰出さる	
6月	5清涼殿木形の櫛形窓高さを検討	3清涼殿の紺青引きは略製に 5光貞、泥引を連言するも却下 11色紙形古図、櫛形窓1/10図提出	
7月		7月和画名所和歌治定 23昆明池障子の下絵を提出	
8月	<6/4-22竹の記事多し> 26内裏上棟	4和画名所和歌字持参 10土佐に清涼殿の絵仰付け 13-22竹台竹植様図を描き提出	
9月	26この日より7日間安鎮法	内裏・仙洞の新調御道具御用仰出 14昆明池障子の絵治定	
10月	15地鎮祭	29清涼殿色紙形泥絵出来	
11月	5所司代より内裏引渡し 14御装束始 18大殿祭 22移徙	9-12銭形屏風秋冬一雙出来調進	

政度内裏造営における記録である。勢多章純は検非違使を世襲して禁裏口向役人の執次を勤め、天明8年4月7日に造内裏御指図御用掛を仰せつけられた。彼は「御指図御用記」において下命・上申の内容はもとより、奉行衆と修理職、禁裏方と幕府方などにおける書類・図面の移動を細かく記録している。

(2)「土佐家内裏造営粉本」(京都市立芸術大学蔵)

近世に禁裏絵所預を世襲した土佐家に伝来した粉本²⁾の中に、「天明八年申五月／造 内裏御用／画所預」の表書をもつ紙袋に納められた43点の資料がある（以下「土佐家内裏造営粉本」と記す）。内容は内裏の建物や建具の図であることから、表書にある天明8年に造営御用が始まった寛政度内裏の資料である可能性が高いと考えられる。また禁裏へ提出した図の目録と思われる次のような書付が含まれ、竹台など復古内裏で復元されたものが認められた。

- 一 神仙門 敷政門図
- 一 無名門 左青鎖門 明義門 仙花門 恭礼門
内衛門 宣仁門 右青鎖門等図
- 一 左近陣座 宜陽殿 公卿座 次将座 大臣宿所
政官侍議所等図 *
- 一 下侍床高サ図
- 一 主殿司宿床高サ図
- 一 南殿四隅板屋図
- 一 竹台図 透方 *
- 一 石灰壇図 胡粉塗 *
- 一 櫛形図 并在所高低之図 *
- 一 日月花門図 *
- 一 清涼殿東階之図 *

以上の図面のうち、* 印を付けた6点が現存するが、門図など失われた建物図も少なくないことを示唆している。

寛政度内裏の造営御用を仰せつけられたのは土佐光貞で、早世した兄光淳に代わり禁裏絵師を勤めていた。「御指図御用記」では光貞は「土佐土佐守」、光淳の子で絵所預の光時は「土佐将監」の名で登場する。

2. 造営の経過と絵師の動向

「御指図御用記」の記事により造営過程を示したのが表1である。絵師の仕事に注目すると、集中的に土佐が仕事をしている時期が3期あることが分かる。

第1期は「御指図御用記」の記録が始まる天明8年5月から7月頃までで、5月には御用掛が仰せ出され、大工方では『大内裏図考証』に従って平面の作図が行われたが、未だ復古様式による造営は決定されていない。この時期の絵師の仕事は平安内裏に関する資料を集めることで、これらの作業のピークは松平定信が上洛する5月23日頃であった。

第2期は復古造営が決定したのちの天明9年正月（25日に改元）から寛政元年3月頃までで、「立図」や「紙建起図」ができ、立面、天井、屋根の検討が行われた時期である。『大内裏図考証』は平面と建具については詳しいものの、立面についての情報は少ない。この時期には軒高、床高、屋根仕様などが検討され、屋根雛形、鴨居下雛形など諸種の雛形が製作された。絵師は建物の細部を古図から集めて提供し、また部分的に障子絵の制作にも取りかかった。

図 1 月華門(「年中行事絵巻」巻 10)

図 2 日・月華門図

図 3 日・月華門扉図

第3期は寛政元年5月から寛政2年11月の引渡し・移徙までである。5月8日に紫宸殿、閏6月29日に清涼殿の木形が完成し、7月4日に新始が行われると、内裏は本格的な造営工事が始まった。そのかわり、設いのための諸道具が工房により製作され、寛政2年10月には泉水・竹台などの植栽が行われた。絵師の土佐光貞は清涼殿などに障子絵を描く一方で、諸殿舎の障子絵制作に参加する70名の絵師のとりまとめ役として多忙を極めていた。この第3期の障子絵制作については別稿を予定しており、本稿では触れない。

以上の3期はいずれも明確に作業の内容が分かれる訳でなく、工事の進展に従って計画の見直しや資料の探索が繰り返された。

3. 建築の外観・内部に関する模写及び復元

第1期の天明8年5月から7月の早い段階では、建物の外観や内部を描いた古図が収集された。「御指図御用記」の天明8年5月17日に次の記事がある。

一、広橋殿御渡

賢聖障子、通障子、竹台、石灰壇塵壺、櫛形、日月花門扉。

右古図可入御覧候様土佐土佐守江可申渡候。土佐守罷出居可申間、此段被命候旨也。土佐守御先刻表より御下候候間当番より召寄有之。依而御所江呼寄申渡候处、明後星迄ニ可上候旨御請申上候ニ付非蔵人但馬を以申上ル。御承知退出致させ候様被下ニ付退出申渡候。

すなわち5月17日、議奏広橋伊光から土佐光貞へ賢聖障子、通障子、竹台、石灰壇塵壺、櫛形窓、日・月華門扉の古図を提出せよという命があった。日・月華門以外はいずれも宝永度までの近世内裏には存在せず、『大内裏図考証』にも図のないものである³⁾。

19日に光貞は参上し、賢聖障子は全体図がなく部分図しかなかったこと、通障子もほとんど古図はないこと、しかし竹台、石灰壇、櫛形、日・月華門については資料があり持参したことを報告した。当日、光貞が禁裏に提出した図の下描き、あるいは控えと思われる図が「土佐家内裏造営粉本」に見いだされる。

(1) 日華門・月華門

平安内裏においては、紫宸殿南東の宜陽殿と春興殿の間に日華門が、南西の校書殿と安福殿の間に月華門が設けられていた。寛政度内裏では紫宸殿南庭を回廊が囲み、東辺に日華門、西辺に月華門が設置された。『大内裏図考証』は「年中行事絵巻」(図1)に図があるとするが、実際には建物の全容は描かれていない⁴⁾。光貞は19日に図を持参し、日・月華門の詳細は不明なこと、普通の扉と異な

り外開きなので、開くと「貫之木」(門)が内側に出張る特徴があり、その様子も描き添えたことを報告した⁵⁾。「土佐家内裏造営粉本」の図2・3がこの記事に相当すると考えられる。図2は間口3間の門を正面から描き、右上に「日華門之外東面/月華門之外西面」と記している。屋根は起りのある檜皮葺で、門の左右には門より規模の大きな建物が描かれている。この形状から本図は「年中行事絵巻」に描かれた平安内裏の日・月華門を、土佐光貞が透視図風に引き直したものと推察される。

一方、図3は表に扉図と御簾図、裏に櫛形窓図が描かれた草稿の一部である。これは図2の扉を外側に開いた状態を描いており、19日の報告にある「門が内側に出張る」という特徴を表している。

3日後の22日に光貞が追加の絵図を届けに参上したところ、幕府奉行衆から日・月華門の破風について説明を求められた。そこで光貞は日・月華門は殿舎の間の門であり、殿舎の屋根は高く門の屋根は低い、従って破風は分からない、と回答した⁶⁾。26日には回廊を瓦葺きに描くよう命じられていることから、図2はそれ以前の初期的な図と考えられる。

(2) 承明門

同じ頃、土佐光貞は承明門の図も探索するよう命ぜられ5月25日に提出している⁷⁾。承明門は平安内裏では紫宸殿南庭の南に設置されていた門で、中世にはなくなり寛政度内裏で復活した。『大内裏図考証』は「年中行事絵巻」巻4賭弓(図4)などの図を挙げ、「檜皮屋、円檻五間三戸、壇囲以条石石板、石階内二級外三級」と考察している。

「土佐家内裏造営粉本」に含まれる門の図(図5)は、上記の特徴を備えていることから承明門を描いたと考えられる⁸⁾。透視図風に描き、妻の部分や建物の構造を示す描写が少ないなど、図2と共通する描き方をしており、「年中行事絵巻」をもとに作画したと思われる。翌26日、再び光貞に修理職奉行である日野資矩から、回廊の屋根部分を瓦葺きに描き直すよう指示があった⁹⁾。図5は廻廊・門が檜皮葺きであることから、古図から作成した最初期の図であると思われる。

一方、図6は承明門を斜め上から見下ろした図で、扉部・基壇をはじめ、瓦葺き屋根・妻飾り・二重虹梁などが細かく描かれている。承明門に破風や妻飾りを用いることを決定したのは、7月18日のことであり、それ以降に制作されたと考えられる。

(3) 竹台

竹台は紫宸殿の東庭にある呉竹、漢竹の植え込みを囲う垣である。

図4 承明門（「年中行事絵巻」）巻4

図5 承明門図

図6 承明門図

図7 竹台図

図8 石灰壇図

図9 櫛形窓図

『大内裏図考証』では、竹台の図として「年中行事絵巻」「石山寺縁起」「伴大納言絵詞」「承安五節図」「雲図抄図」を挙げる。5月17日に古図の探索を命ぜられた光貞は19日に図を提出し、図の内に板張のあるものとなないものの2種がある。いずれも竹は平地に植えてあり、地面に直植えをして垣をするらしい、と報告している¹⁰⁾。

「土佐家内裏造営粉本」には竹台を描いた図が4点あるが、その内の1点は格子の間から竹が見えるもの（図7）で、別に格子から竹の見えない図もある。ちなみに古図の中では、「年中行事絵巻」は竹が見えず、「伴大納言絵詞」には明瞭に格子の間に竹が描かれる。結局、竹台は目録にある「透方」が採用された。

竹台はその後、竣工間近い寛政2年8月に、竹の植え方を示す図が土佐により制作されている。

(4) 石灰壇

石灰壇は清涼殿の東庇の東南にある地炉である。かつて天皇が清涼殿に居住していた際には臨時の簡便な炉として用いられ、塵を集めて捨てることから塵壺ともいわれた。古図を差出すように命ぜられた土佐光貞は、5月19日に参上して塵壺の寸法や蓋の表など不明部分が多いことを報告している¹¹⁾。「土佐家内裏造営粉本」の図8は、石灰壇の部分に白く彩色しており、目録にある「石灰壇胡粉塗」に相当すると考えられる。『大内裏図考証』は石灰壇の図として「中殿御会図巻」を挙げているが、本図は同図巻を平面図に引き直したものと考えられる。

(5) 櫛形窓

櫛形窓は母屋と南庇殿上間との境に設けられ、床の高い母屋側からは殿上間を覗くことができたが、逆からは見えなかったとされる。『大内裏図考証』では「禁掖秘抄」などの図を採録するが、平面図に窓の位置を半円形で記したものにすぎない。しかし光貞は古図を持

参し、窓の大きさは不明、横の小（棧）は柳筥（断面が三角形の柳で編んだ箱）のようだ、形も2種類あるが、丸形に定めるとのことなので伝来の古図で描いたと報告した。さらに古図の出所を問われ、誰が写したかは不明と答え、さらに調べるよう命ぜられている¹²⁾。

図9は丸柱を挟む櫛形窓を立体的に描いたものである。同じ図が図3の裏にも描かれており、「大サ高サ等不知」と記されている。「御指図御用記」によれば櫛形窓の大きさ高さが決定したのは、清涼殿木形が製作される寛政2年6月5日のことであった。

(6) その他の絵巻物の模写

土佐光貞はさらに内裏の内・外観、建具などの古図を探索するように命ぜられた。黒戸の蓐については5月24日に古図がないと回答し¹³⁾、昆明池障子の仕様については6月13日に大縁ばかりの図と小縁のある図の2種があると回答している¹⁴⁾。さらに清涼殿の障子類については6月15日に、あまり資料がないが「伴大納言絵詞」に少々絵があったので写した、として提出し¹⁵⁾、同日「鳴門少将物語絵巻（なよ竹物語絵巻）」の障子を「正面図」に引き直すように命ぜられている¹⁶⁾。

この時期、光貞は公家から出されるさまざまな注文に対し、自家に伝来する粉本を写して持参したり、この時に禁裏に借り集められた絵巻物を写して応えた。これらの記事を裏づけるように「土佐家内裏造営粉本」には絵巻物の一部分を写した図が数点存在する¹⁷⁾。

図10は左側は「年中行事絵巻」巻6の御灯の段、右側は「伴大納言絵詞」を模写したものである。左側は年中行事衝立障子の図柄を、右側は昆明池障子と絹障子の図柄を参照するために描いたと考えられ、人物など不要な描写を省いている。

また図11は「年中行事絵巻」別本巻2「擬階奏」の模写で、先述の目録にある「左近陣座図」はこの図を指すと考えられる。人物

図10 清涼殿図

左「年中行事絵巻」模写
右「伴大納言絵詞」模写

図11 陣座・宜陽殿図（「年中行事絵巻」模写）

図12 妻戸図

図13 折戸図

などは省かれているものの、描写は丁寧で、右側に「此邊大臣宿所且上官候儀所等殿／図不知」など独自の考察が記されている。また天明8年7月25日には、光貞は殿上間東面の上方にある小部の図を提出している。この図にあたるものが「土佐家内裏造営粉本」に含まれており、「中殿御会図巻」の模写であることが判明する¹⁸⁾。「土佐家造内裏粉本」には、他に「年中行事絵巻」巻10の南殿の桜、「法然上人絵伝」巻42の門の図の模写などが認められる。

内裏造営に関わる絵師の仕事としては、障壁画制作のみが知られていたが、建築についても重要な役割を果たしていたことが明らかになる。光貞は建築の参考図を古図から探索し、それらを模写して提供した。また分かりにくい図については透視図風に描き直し、時には知見を披露し、復古に関する提言を行ったことが判明する。

4. 建築細部に関わる絵画資料の収集

第2期の寛政元年正月から3月頃になると、清涼殿の立面が作られ、建具等の細部に検討が及んだ。光貞は建築のさらに細かい部分、釘隠などの金物、障子の縁や引手などの付属品を、絵巻物から模写するよう命ぜられている。

(1) 妻戸・折戸

この時期、絵巻物からさまざまな建具の図を描いており、2月22日には土佐家伝来の「なよ竹物語絵巻」から唐戸のくるを¹⁹⁾、翌23日には「春日権現験記」から布障子の部分を写すよう命ぜられた²⁰⁾。これらの記録から絵巻物参照の目的は、建築や建具の細部の確認であり、参照の対象を明確にして模写したことが分かる。

妻戸を描いた図12も俯瞰図であることから古図の模写と考えら

れるが原画は明らかでない。これは釘隠や金物に注意が払われ、それらの参照が目的であったと考えられる。また門と同様、複雑な造りの折戸も透視図風に作画された(図13)。

(2) 棹の間

さらに、宝永度までの近世内裏には存在しなかった施設が絵巻から復元された。棹の間は清涼殿南庇の殿上間の柱間に横木を渡したもので、本来、殿上御椅子の覆いを掛けたものであった。光貞は2月26日に、絵巻物と「敷図」を見て棹の間の構造を「得と相考」えるように命ぜられ、修理職役所に「敷図」を見に行き、翌27日に提出している²¹⁾。この記録と関連があると思われるのが図14である。実際よりも縦長の柱間に、縦横比を無視した細い柱を描いており、現実の建物を見ないで描いていることが分かる。

(3) 襖縁・引手

また襖の付属品についても検討が進められていた。2月13日には土佐光貞が襖障子の縁の紋の濃色と淡色の2種、引手の紐、絵形一枚を持参した。縁は「承安五節図」を参照するように指示されていたが、詳しくないので高祖父光起による土佐家伝来の図で描いたとしている²²⁾。禁裏絵所預の土佐家には、かつて制作された内裏調度の資料が存在したことが判明する。

本図と関連すると思われるのが図15の障子縁(軟錦)図である。花菱と菊の図柄を、上半分に濃彩色、下半分に薄彩色で描き、13日の記事と一致する。

また光貞は引手の図も持参し、「恰好相応」とのことであったので、このようなものであろうかと認めた、としている。細部は土佐の感覚に任されたことが分かる。図16は絹障子の引手を写したも

図 14 障子の間図

図 15 軟錦図

図 16 絹障子引手図

ので、別に引手図と縁図を1枚の紙の表裏に描いた素描もある。障子の縁と引手の図が同時期に制作されたことが分かり、13日の記事に関係することが明らかである。

障子の縁は2月16日に幅2.3寸と治定するが、図15は352×71mmのほぼ実物大に描かれており、提出図はそのまま織方に示されたと考えられる。ちなみに、提出された引手図は6月24日に他の障子図とともに幕府方に引き渡されたが、10月19日に紛失していることが判明し、土佐に控えがあれば差出すよう命じられた。大詰めを迎えた作業の混乱ぶりが推察される。

(4) 帽額・御簾・房

同じ頃、御簾とその上部を覆う帽額、さらに緒の房についても検討されている。2月30日には「石山寺縁起」「春日験記」から御簾と帽額の紋様を写させ、5月24日には、紋について土佐光貞の「存寄りの儀」を問いただしている。土佐が単に絵巻模写だけでなくさまざまな情報を提供したのである。「御指図御用記」によるとこれらの御簾、帽額、縁、房、金物の図は5月28日に絵図の通りに試作するよう簾屋に渡され、写し取ったとして6月3日に返却されている。すなわち絵師の土佐の描く図は、そのまま職人へ指示するための図としても用いられたのである。

第2期になると建物の細部や建具の考証に入り、土佐の描く図も細かく、具体的になったことが分かる。

おわりに

「土佐家内裏造営粉本」に含まれる建築図は寛政度内裏のもので、そのうち何点かは「御指図御用記」から制作時期や背景が明らかになった。中でも注目されるのは、未だ復古造営が決定しない初期的な段階で、多くの建物図を描いていることである。これは松平定信の上洛を前に作業が進められていることから、幕府側に示すために制作されたと思われる。光貞は「年中行事絵巻」の断片的な資料から日・月華門を復元したり、承明門の透視図を描き、復古様式のイメージを確かなものにした。

つぎに立面や細部の検討が行われていた寛政元年正月以降になると、『大内裏図考証』にも記述のないものが多く、新たに絵巻物から詳しい資料が収集された。その古図の探索と参考図の制作も土佐の役目であった。古図から参考図を制作する際には、障子の絵柄の参照図、金物参照の図など、目的を絞った図がその都度制作された。

この時期にも透視図風の図が制作されており、古図を解説するのに、専門絵師の助けが必要であったことを示している。絵師の描く詳細で明瞭な図は、そのまま職人に下図として示されることもあった。

宝永度までの江戸時代の内裏造営は、幕府が造営料を負担する公儀作事として行われ、幕府主導のもとに進められている²¹⁾。しかし寛政度内裏では、朝廷の側が積極的に資料を収集することによって幕府をリードし、復古内裏を実現させた。絵師の土佐家は朝廷側の意向に沿って、種々の古図を探索し、平安内裏の外観や内部に関する可視的な情報を提供し、また復古内裏の具体的な細部仕様に關する絵画資料の収集と情報提供を行っていたのである。

次稿では、同じく朝廷側の意向を受けて活動した、大工の役割について考察したい。

註

- 1) 建築史学では藤岡通夫『京都御所』(彰国社1956)、平井聖編『中井家文書の研究7』(中央公論美術出版1982)、谷直樹編『大工頭中井家建築指図集一中井家所蔵本一』(思文閣出版2003)に中井家の指図が紹介されている。藤岡、平井の上記本と島田武彦『復古清涼殿の研究』(思文閣出版1987)、天木詠子・西和夫「寛政度内裏の障壁面制作における平安復古について」『日本建築学会大会学術講演梗概集(東海)』(1994)は「御指図御用記」を用いた論考である。歴史学では時代背景を論じたものとして、久保貴子「改元に見る朝幕関係」『近世の朝廷運営』岩田書院1998、初出1991)、藤田覚『近世政治史と天皇』(吉川弘文館1999)などがある。また『大内裏図考証』について論じたものに西井芳子「裏松固禪とその業績」『平安博物館研究紀要2』第2輯1971)、福田敏朗『大内裏図考証』の成立について一裏松固禪の製作と内藤広前の補正一』『京都府埋蔵文化財論集』第1集1987)などの研究がある。美術史では千野香織「建築の内部空間と障壁面—清涼殿の障壁面に関する考察」『日本美術全集16』講談社1991)、岩間香「寛政度御所造営と土佐派の名所絵」『土佐派絵画資料目録(三)』京都市立芸術大学芸術資料館1992)、松尾芳樹「寛政度造営における清涼殿障壁面について」(同書)などがある。
- 2) 粉本は下絵、古画の縮図、写生など絵画制作の参考にするもので、近世以前の職業絵師は必ず自家に粉本を所持していた。土佐家の粉本は京都市立芸術大学に「土佐派絵画資料」として収蔵されている。同資料の造内裏関係図は『土佐派絵画資料目録(三)内裏造営粉本』(京都市立芸術大学芸術資料館編、1992)として刊行された。
- 3) 日・月華門は、宝永度以前の内裏では周囲の建物が失われ、門のみが単立していた。
- 4) 「年中行事絵巻」には4箇所の日・月華門が描かれ、「踏歌節会」に檜皮葺屋根が、その他の箇所には屋根の下部分が描かれている。
- 5) 天明8年5月19日条「日月花門扉、是も委事不相知候。都而、門扉へ開へ貫ノ木外へ成候物二候処、日月花門二限り開ノ内二貫木出有之候物二候。仍而、其体も記申候。」

- 6) 天明 8 年 5 月 22 日条「一 土佐土佐守／一昨日被仰付候図面持参、則表へ召連参但馬へ掛合相渡、(略) 日月花門破風之様子不相知候。日花門、宜陽殿、校書殿ノ間ニ有之候門ニテ、右両殿ノ柱ヲ門ノ柱ニ用候様子、依之破風之處不相分、月花門モ安福殿ト^(マ)殿トノ間ニ有之門、日月とも殿ノ屋脊ハ高、門ノ屋脊ハヒキク体有之。惣而諸門ノ屋脊、兎角不相知候旨ニ而之。後刻土佐守表へ召連参、但馬面談、直々掛合せ候也。何も御承知。」但し殿舎の名称は実際と異なっている。
- 7) 「御指図御用記」には命じた記録はなく、天明 8 年 5 月 25 日条に「承明門絵図上候様、被仰付申達候処、今日上り候筈之由、淡州被聞、則土佐守持参ニ付、淡州受取被上」とある。
- 8) 図は柱列が描かれていないという誤りを犯しているが、他の条件は『大内裏図考証』の示す承明門に一致する。内裏に柱列のない 5 間の門は存在しない。
- 9) 天明 8 年 5 月 26 日条「一、土佐土佐守／昨日、承明門之図上候処、両端廊ノ屋脊瓦之筋無之ニ付、屋はつし両端とも瓦筋付上候様、被命申達有之候処、出来ニ付今日持参。」
- 10) 天明 8 年 5 月 19 日条「竹台両様、菅ツハ囲ノ内板張、菅ツハ板張無之体也。都而、平地ニ竹ヲ植、垣ヲ致候物ノ由。台と有之候故、梓ノ如物拵、上ニ竹ヲ植候得共、本義ハ平地ニ植、垣ヲ致候ものと見候由。」
- 11) 天明 8 年 5 月 19 日条「石灰壇・塵壺、是ハ格別申分無之。但塵壺体寸法も不知候。蓋有之趣ニ候。表も如何致候体哉、不知候。裏ハ朱塗と見候而、蓋、御返し候体相見候由。」
- 12) 天明 8 年 5 月 19 日条「櫛形、是もマトノ大サ不相知、横ニ入候小ハ柳筥ノ如ク、形も両様有之候得共、丸形ノ方定由ニ候旨、勿論古図伝来之由也。」「櫛形ハ伝来候古図ニ而候。」
- 13) 天明 8 年 5 月 24 日条「黒戸脇小半蔀図、可上候旨被仰出、土佐守申渡候処、此図有無、疑と不覚候。無之処ニ存候。猶相調有之候ハハ、認可上候旨申上ル。」
- 14) 天明 8 年 6 月 13 日条「大ヘリ斗之図又ハ小ヘリ有之図も相見候。金具形粉本不一樣候」
- 15) 天明 8 年 6 月 15 日条「清涼殿御絵之事不見候、伴大納言物語ニは少々絵之事見候ニ付認上候。」
- 16) 天明 8 年 6 月 15 日条「絵巻一卷【盧竹物語ノ由】但馬持出、右之内、障子有之候処、正面図ニ引直し可上候旨申。則於勘使所引直し図出来。則但馬へ渡ス。」
- 17) 土佐家の粉本には絵巻物の縮図が多く含まれているが、図 10、図 11 は「造内裏御用」と記された袋に納められており、他の縮図と区別されている。
- 18) 天明 8 年 7 月 25 日条「一、土佐守名代、土佐左近将監／妻戸之上小蔀図并揚蔀裏横筋之図、則此日御覽御返し有之候。小蔀妻戸有之図、差添持参。但馬を以上ル。」なおこの図は蔀図の裏に描かれたため、裏打ちにより現在見ることはできない。
- 19) 寛政元年 2 月 22 日条「一、土佐守／右召連可参旨ニ付表口へ召連参、日野殿御達、土佐守方ニ所持之鳴戸絵巻物之内唐戸図、写候而、明日可上候旨、被命御請申上ル。」、寛政元年 2 月 23 日条「一、土佐守殿／日野殿昨日被仰付候絵巻物【一鳴門少将／一なよ竹物語】之内唐戸図【クロハ有之図】持参受取日野殿へ／上ル」
- 20) 寛政元年 2 月 23 日条「一、土佐守召連可参旨ニ付、表口へ召連参、日野殿御達、絵巻物【南都権現記之由ナリ】弐巻被出、右之内布障子絵有之、菅ツハ布障子ニ絵有之獅子、菅ツハ無地、両方とも写可上候旨、被命御請申上ケ於勘使所認。右両図とも出来ニ付受取、豊岡殿を以、上ル。」
- 21) 寛政元年 2 月 26 日条「一、土佐土佐守／(略) 絵巻物被出、殿上小坂敷之処、丸柱・小柱之間ニ冠木入【棹ノ間ト云】、此冠木両方之柱ニ彫込、鋸釘ニ而留候、其体可画。何も敷図拝見、得と相考可画旨被命、御請候。修理職役所へ同伴参、敷図拝見致候之由也。」
- 22) 寛政元年 2 月 13 日条「一、土佐土佐守／一 昨日被仰付候、緑地紋花菱・菊之紋、色濃と薄之両様也。并引手紐紫スソ濃絵形老杖持参、右縁之儀承安五節図ニ依而可認旨ニ候得共、承安五節之図と申物不委候。是ハ伝来之図ヲ以認候。是ハ高祖父時分ニ被縁候御図有之被仰付候。認上候儀有之候と被存候。」
- 23) 『中井家文書の研究 7』(前掲)

付記：「造内裏御指図御用記」の入力及びデータ整理に、大阪市立大学大学院生活科学研究所の蘆谷美美氏の協力を得た。

図 1、図 4 は『日本絵巻大成 8』(中央公論社 1977) からの複写である。

(2004 年 1 月 10 日原稿受理, 2004 年 3 月 5 日採用決定)